

橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究

— 第一報・和装本類

町 泉 寿 郎
新 井 通 郎
鈴 木 亮

I 寄贈に至る経緯

このたび、本学（前身、二松学舎専門学校）にゆかりの深い故橘純一先生のご遺族から、橘守部以来の橘家家伝資料が寄贈された。平成十七年三月二十四日、玉谷純作氏（純一の孫）が来学され、資料寄贈の申し込みがあり、これを受けて図書館小林憲二副部長が、純一・文三二代にわたって住んだ大田区久ヶ原の橘家に赴き資料の下見を行った。一カ月後の四月二十四日に柏図書館に資料が搬入され、ついで故文三氏（二松学舎専門学校第十七期卒）令夫人恭子氏から寄贈申込書が提出された。

資料寄贈をうけて、五月に開かれた平成十七年度第一回の大学資料展示室運営委員会において（山崎正伸委員長）、本資料の今後の取り扱いが協議され、まずは運営委員会を中心に資料の調査を行うこととなった。書画類に関しては寺山葛常委員、および深井信正委員の鑑定を経て、すでに一部の装丁を改めるべく、業者に発注した。町は同月に寄贈資料を和装本・

洋装本・書翰文書・草稿・書画・写真・器物に大別し、今夏期休暇中、本学・他大学の大学院生の協力を得て、まずは和装本から整理作業に着手した。本稿は、その整理作業の第一次報告である。

II 橘家歴代の略伝・系図

以下、橘家の家伝資料について記述するにあたり、同家歴代の伝記的事実をある程度把握しておくことは不可欠である。ただし、江戸時代後期の国学者として著名な守部には既に単行の伝記があり、⁽¹⁾大正・昭和前期の国文学者として著名な純一にも學術誌の追悼記事・略年譜・業績一覧が備わり、⁽²⁾改めて多言を要しない。紙幅の限られた小稿では、守部・純一に關しては最小限の言及にとどめ、寄贈資料にかかわりが深く、かつ必ずしも前掲資料が尽していない、冬照・東世子・浜子・道守・濤子・茂丸らにむしる重点を置いて、橘家の歴史を略記しておきたい。

日付については、旧曆・新曆の変わり目が問題になるような場合を除いては、區別せずに記した。年齢は数え年である。

初代・橘守部 天明元年（一七八一）四月八日〜嘉永二年（一八四九）五月二十四日、六十九歳。幼名は旭谷あさいや―吉弥、名は庭曆にわまる―守部もりべ、通称は元輔もとすけ、別号は蓬壺もみぢ―波瀲舎なぎさのや―池庵いけいん―生薬園いくすりぞの―椎本舎しいがものや、法号は深達院光耀常円居士。

伊勢国朝明郡小向村に飯田長十郎元親の男として出生、父歿後、江戸に出（一七九七）、漢学を葛西因是（一七六四〜一八二三）に、国学を清水浜臣（一七七六〜一八二四）に学ぶ。武蔵国葛飾郡内国府間村（現埼玉県幸手市内国府間）に移り（一八〇九）、桐生・足利の富商たちの援助を受け学的研鑽を積む。廻船問屋田村清八の女政子（一七九二〜一八六九）、深政院妙円鏡智大姉）を娶り、一男一女を儲けた。再び江戸に出（一八二九）本居宣長の学説を批判して、一家の説を樹立した。平戸藩松浦家の厚遇を受けた。⁽³⁾

二代・橘冬照 文化十一年(一八一四)〜文久三年(一八六三)六月二十九日、五十歳。幼名は茂松^{しげまつ}・茂三、名は親^{ふゆてる}・冬照、別号は凌雲・柯蔭、法号は冬照院全恵田良居士。

父守部・母政子の長男として幸手に出生。国学を父に学び、江戸移住後、一時、漢学を西島蘭溪(一七八〇〜一八五二)に学んだ⁽⁴⁾。寄贈資料中の漢籍・準漢籍のうち、鈔本は殆ど冬照が文政から天保にかけて書写したものである。妻東世子との間に一女を儲けたが早世。

橘東世子 文化三年(一八〇六)九月五日〜明治十五年(一八八二)十月十五日、七十七歳、東世院壽量妙秀大姉。

品川の商賈河合新六の長女。三十三歳で二十五歳の冬照に嫁し、よく歌学を修め、夫歿後は養嗣子道守を輔け、平戸藩邸に出入りし、また椎本吟社を支えた。寄贈資料に詠草一冊(本目録36)が残る。明治八年より『明治歌集』⁽⁵⁾を刊行する。

橘浜子^{はまこ} 文化十四年(一八一七)〜弘化二年(一八四五)十二月七日、二十九歳、清渚院玉貞汀大姉。
守部・政子の長女。守部の前半生を記した『橘の昔語』(天保十四年成)の著作がある。

三代・橘道守^{みちもり} 嘉永五年(一八五二)二月十三日〜明治三十五年(一九〇二)四月二十一日、五十一歳、通称は東市、道守院円麗清照居士。

父加藤安兵衛(一八一九〜一八八一、吉田錦所(安平)、蘭誉宜中錦所豊居士)・母吉田いと(守部の有力門人吉田秋主の女)の男として桐生に出生。冬照・東世子夫妻には男子が無かったため、橘家の養子となった。冬照歿後、平戸藩から扶持を受けた。椎本吟社を興し、雑誌『明治歌林』を発行し、東世子歿後は『明治歌集』の編纂を引き継いだ。明治五年(一八七二)、本所太平町から同松倉二丁目に転居。寄贈資料に数種の詠草・歌合が残る。また実父の旧蔵書が混じる(本目録98)。

橋濤子^{なみこ} 嘉永六年（一八五三）九月十九日⁽⁶⁾、昭和五年（一九三〇）一月十四日、七十八歳、壽光院守成妙宏大師。

岩崎庄之助（平戸藩士）の長女、東世子の姪にあたるともいう。道守との間に三男五女を生んだが、多くは早世⁽⁷⁾。夫歿後、戸主となり、純一を養子に迎えて家の存続に腐心した。大正四年（一九一五）、本所区小泉町二十九番地から牛込区市谷仲之町四十一番地に転居。『橋守部全集』出版にも尽力している。寄贈資料に詠草一冊（本目録44）が残る。

橋茂丸 明治三年（一八七〇）二月、明治三十年（一八九七）四月二十一日、二十八歳、寂光院春岳常相居士。父母に先立って早世したが、寄贈資料に詠草一冊（本目録41）が残る。

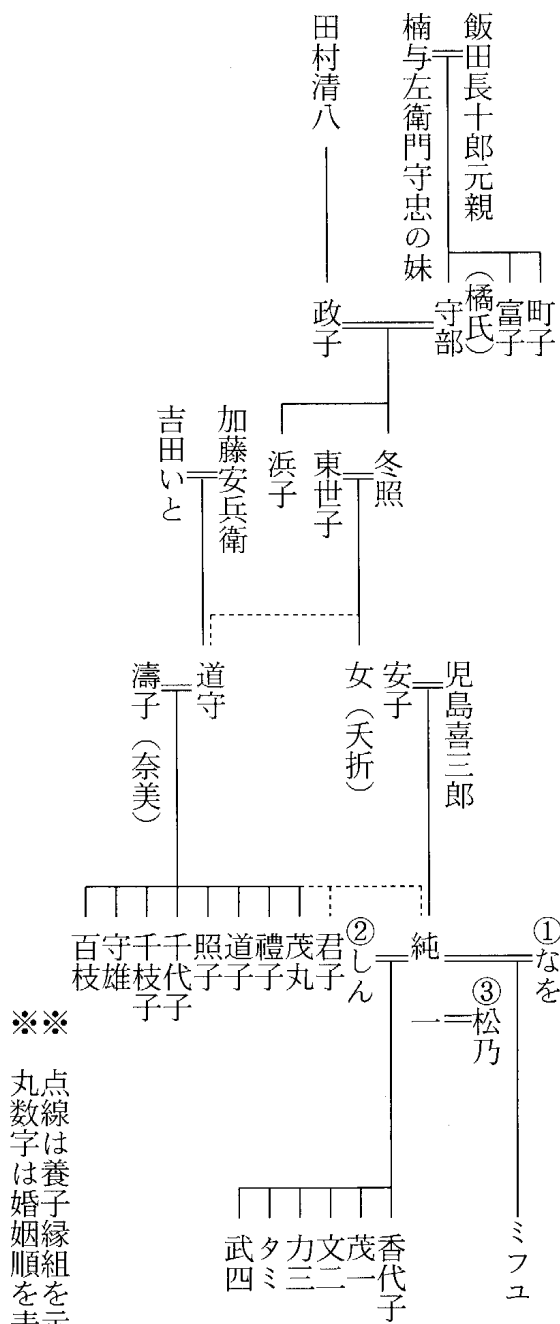
四代・橋純一 明治十七年（一八八四）二月二十五日、昭和二十九年（一九五四）一月十九日、七十一歳。

東京市京橋区木挽町に輸入機械商を営む初代児島喜三郎（一八九九）・安子（一八九六）の五男として出生。児島氏は橋東世子の旧知であった。私立鍋町小学校（一八九七卒）、府立一中（一九〇二卒）、二高（一九〇五卒）を経て、明治四十二年（一九〇九）七月十日、東京帝国大学文科大学文学科（国文学専修）を卒業。卒論「近松半二」。これより先三月四日、橋家の養子となる。文科大学助手（一九一一・九）、国語研究室、陸軍教授（一九一三・一一）、新設の府立五中首席教諭（一九一九・三）を勤め、依願免官後（一九二五・四）、日大・東洋大・東京商大・駒澤大・日本女子大などに教鞭をとる。この間、家督相続（一九二五・十二）。数年の著述生活の後、昭和三年（一九二八）四月、二松学舎専門学校の開設時に専任教授・国語科主任となり、同十六年（一九四一）四月、陸軍教授に再任されるまで同職にあり、以後も昭和二十四年（一九四九）の大学開設をへて同二十五年（一九五〇）三月の東京文科大学改称まで講師として出講した。その後は、跡見短期大学教授を勤めて、在職中のまま逝去した。佐佐木信綱は「かなしきかも守部の大人の後をうけて道きはめまさむ君とおもひしを」という弔歌を詠んだ。歿後、本学より名誉教授の称号が贈られた。

初婚（一九一四〜一六）の若田なをとの男ミフユは早世。再婚（一九一八）の森田しん（一九三一）との間に四男二女を儲けた。⁽⁸⁾晩年、川副まつのと入籍（一九五〇）。昭和六年（一九三一）四月、牛込区市谷仲之町より大森区久ヶ原に転居。守部追慕の情厚く、大正十年（一九二一）『橘守部全集』を独力で刊行し、昭和四年（一九二九）には守部歿後八十年贈位奉告祭を執行している。「学者の家では血統よりも学統こそ尊ぶべきものである。血筋がつかつてゐるだけでは学者の家をつぐ資格はない。自分は養子ではあるが、守部の学統の正しき継承者のつもりである」と、一中の後輩東條操に語っている。⁽⁹⁾また、『徒然草』『大鏡』などの広範な日本古典に関する註釈・著述や国語解釈学会（一九三六〜三九）の創設により、昭和前期の国文学界に足跡を残した。

なお、守部以来の橘家墓所は長命寺（東京都墨田区向島五丁目）に現存する。

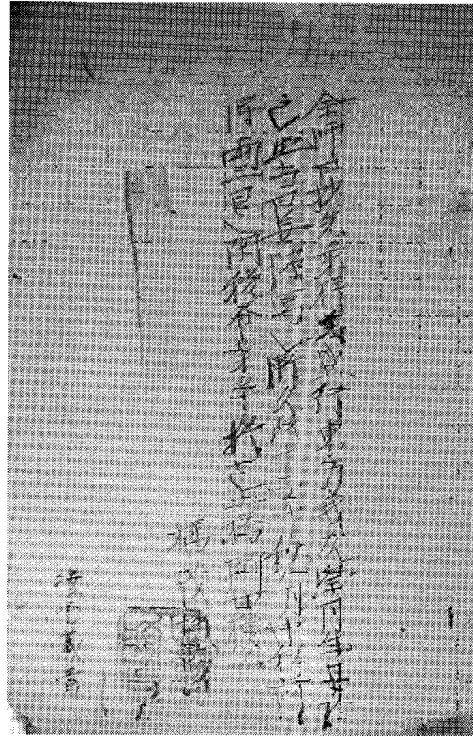
【橘家系図】



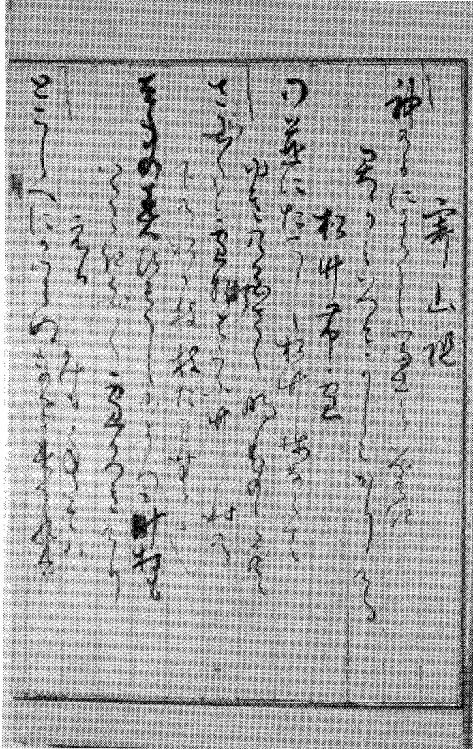
※※ 点線は養子縁組を示す。
丸数字は婚姻順を表す。

【資料】

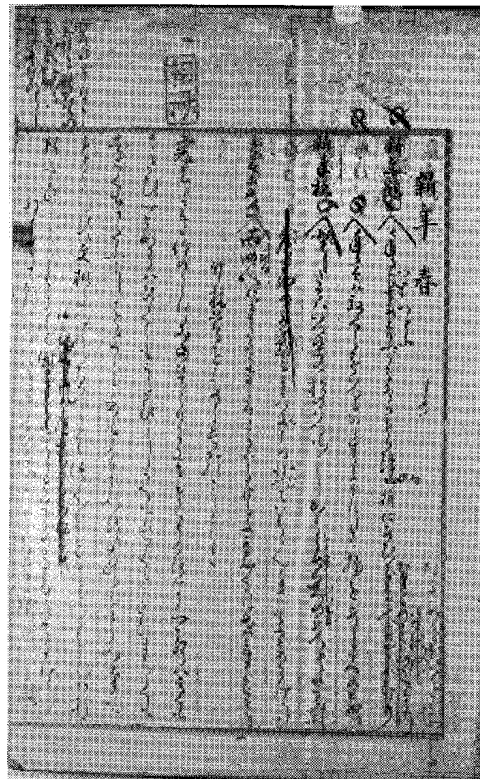
○ 橘冬照筆蹟（『詩本義』本目錄92）



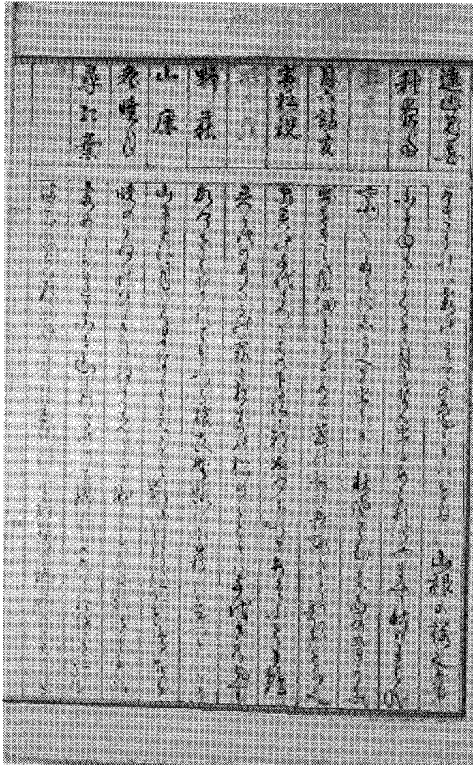
○ 『濤子詠草』（本目錄44）



○ 『橘道守詠草』（本目錄42）



○ 『橘茂丸詠草』（本目錄41）

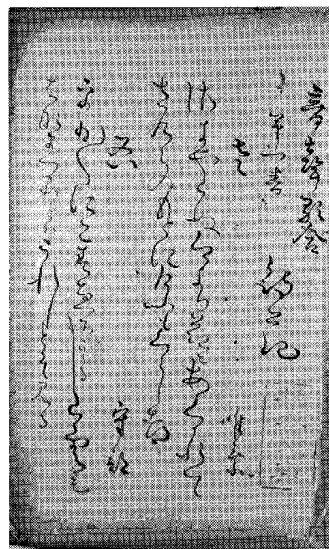




○(上写真) 明治四十二年東京帝国大学文学部文学科卒業写真

前列右端橘純一、中央上田万年・芳賀矢一、後列左から三人目中勘助。全員の名は註(10)参照。

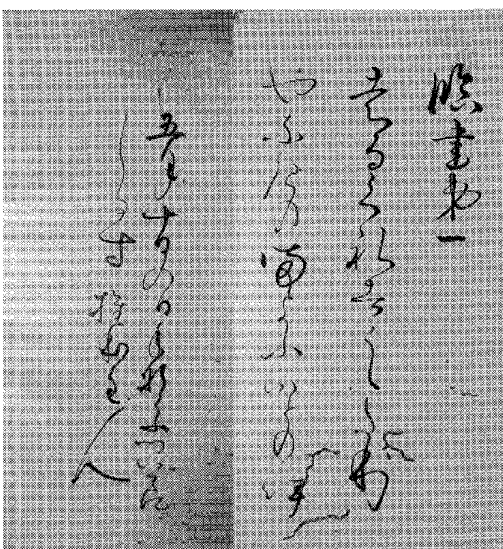
○『音声歌合』(本目録49)



○橘守部墓



○橘守部筆蹟(本目録81)



III 寄贈資料概要

本学図書館に寄贈せられた橘守部・純一資料に就いて、おおよその分類をすれば以下の如くである。

- ・和装本
- ・洋装本（橘純一の編著を中心とする。純一歿後、蔵書が跡見学園女子大学に寄贈せられ、その残余と見られる。⁽¹¹⁾）
- ・写真（明治から昭和期の橘家関係の人物写真が大量に残されている。現時点において人物の特定出来るものは、それほど多くなく、今後の同定作業が重要になる。純一の学校関係の記念写真には人名を記入したものがあり、資料価値がある。⁽¹²⁾）

- ・書画（橘守部以下橘家の人々の揮毫になる書、短冊類。その他勝海舟、井上文雄など橘家伝来の軸物。）
- ・草稿類（橘純一草稿、備忘録など。純一の学的業績を再評価する上で意義ある資料となろう。）
- ・書翰、文書（後述の自筆稿本所蔵機関には少く、特に貴重と考えられる。守部・冬照・道守が関係を持った平戸松浦家関係の文書や、守部・冬照・道守の書翰、来翰などがあるが、精査は今後に俟つ。純一宛の来翰が大量にあり、大正昭和の国文学者の資料として重要な意義を持つ。）

橘守部の著述及びその手沢本は、昭和十四年「橘守部大人自筆遺稿展観入札」として売立が行われ橘家を離れ、財団法人斯道文庫（現慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）と天理図書館に収まるに至った。⁽¹⁴⁾ ほかに、守部の門人で後援者であった桐生の吉田家には、数多の稿本が残っており、また、守部の生誕地三重県三重郡朝日町の朝日町歴史博物館にも遺品などが所蔵されている。⁽¹⁶⁾ しかし、橘家にはこうした売立などによる散佚を免れた資料が存していたのである。

たとえば、百科事典『類語品彙』五十六冊は斯道文庫に収まったが、その複本の存在も今回明らかになった（本目録1）。

『国書総目録』によれば、守部が判者をつとめた『音声歌合』という著作は、「橘純一（大日本歌書綜覧による）・福井久蔵」二点のみの所蔵であり、『橘守部大人自筆遺稿展観入札目録』にも記載がない。この橘純一所蔵本こそ、本学に寄贈せられた一本である（本目録49）。また、斯道文庫蔵『擬難陳歌合』はこれまで孤本の如く見なされてきたものの、新たに二種その存在を確認し得た（本目録50・51）。このように、守部資料に関して言えば、このたびの寄贈資料は「古道」や「言語」に関するものは少なく、歌合や書道手本の類が比較的多い。いわば守部の学芸のうち、世評の高い資料は少なく、そうでないものが多いことになるが、逆言すれば従来評価の不十分な資料を多く含むとも言えよう。

斯道文庫所蔵にかかる守部の遺稿は、『未刊影印橘守部著作集』（汲古書院）として刊行されており、守部研究には欠くべからざる文献となっている。守部の国学観或いは和歌観はそれによって理解できるであろうが、そういった国学観や和歌観がどのように継承せられていったかを分析するには、男冬照、その妻東世子、孫（養子）道守、その妻濤子の著作を精査することが求められよう。寄贈資料のうちにはこれらの人々の歌集も含まれているので、守部以降の橘家の詳細な動静をも知ることが可能となる。さらには、幕末から明治初期の歌壇の動勢を知るに際しても、伝統的な和歌を守った一派の資料として、独自の価値を持つことになる。

IV 蔵書印について

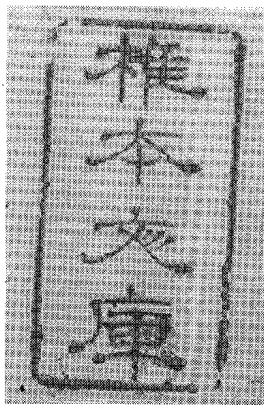
本学図書館所蔵橘守部・純一資料和装本においてみられる蔵書印は、「椎本文庫」、「橘庭」、「蓬壺」、「池菴」、「蓬壺図書」、「唐獅子」、「北畠」、「北畠源印」などが確認できる。蔵書印があるものの解読不能なものも数点ある。

これらの蔵書印の使用者・使用時期の解明、蔵書印の捺された資料の成立年代に鑑みながら、誰によって捺されたものかを見極めることは、今後の課題である。また、北畠、源の性を蔵書印として用いたのは、飯田氏の家系が北畠親房に発

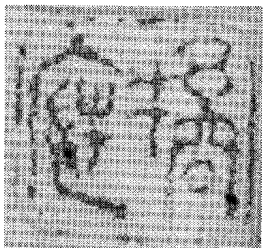
するとされることに拠るの⁽¹⁴⁾であろう。

寄贈された資料に捺されていた中で、特に重要と思われる蔵書印を挙げれば以下のようなになる。

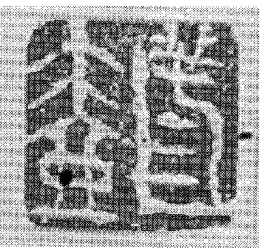
○「椎本文庫」



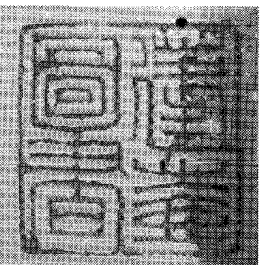
○「橋庭」



○「蓬壺」



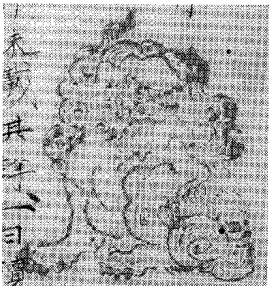
○「蓬壺図書」



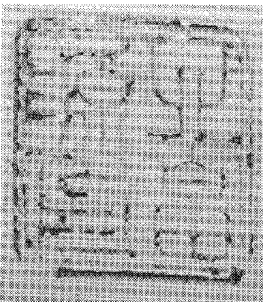
○「池菴」



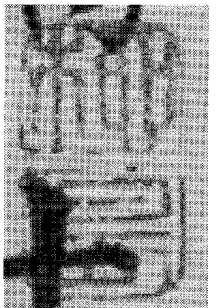
○「唐獅子」



○「北畠源印」



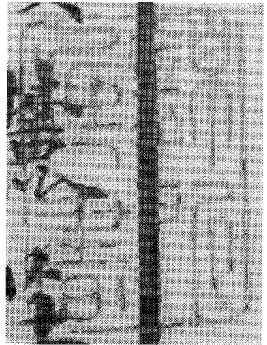
○「柳島」



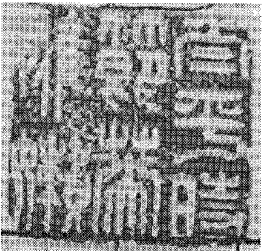
○「錦所玩具」



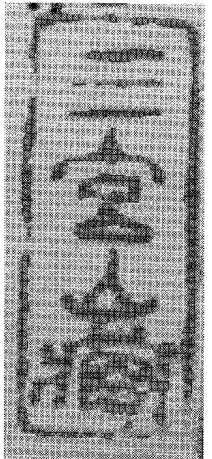
○「錦所蔵書」



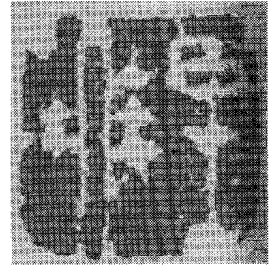
○「太平時節英雄嬾」



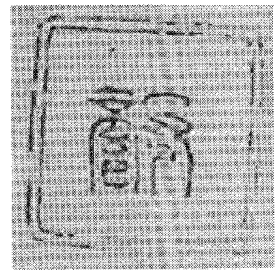
○「三宮山蔵」



○未詳



○未詳



V 二松学舎大学図書館所蔵橘守部・純一資料和装本目録

《凡例》

- 一、この目録には二松学舎大学図書館所蔵の橘氏寄贈による和装本図書九十八点を収めた。
- 二、この目録には、総記、神祇、仏教、言語、文学、音楽・演劇、歴史、地理、政治・法制、経済、教育、理学、医学、産業、芸術、諸芸、武学・武術、準漢籍、漢籍の十九部門を収めた。
- 三、分類は『内閣文庫国書分類目録』（および『同漢籍分類目録』）に倣ったが、所蔵図書の内容によって、分類細目において、該当書がない場合は綱目を立項しなかったり、また該当書が少数の場合は綱目を纏めたり等、適宜変更を加えた部分がある。
- 四、書道手本の分類において、漢籍の分類に入れるべきものもあると考えられるが、本目録ではすべて芸術に収めた。
- 五、一分類綱目内の各書の配列は現代仮名遣い五十音順によるのを原則とした。
- 六、書名の確認し得ない図書については、新たに調査者が附した。その場合は、「」を以て示した。

七、書誌の内容に関する丸番号は、①編著者、②刊写年、③刊写の別・冊数、④丁数、⑤蔵書印、⑥その他を示す。

一 総記

2 事典・事彙

1 類語品彙

① 橘守部 ③ 写本・一〇冊

2 類聚品彙

① 橘守部 ③ 写本・二冊 ④ 各五〇丁

3 叢書

3 群書類従

① 塙保己一 ③ 刊本・二冊 ⑤ 三百六十三「閑齋」、五百十上「椎本文庫」 ⑥ 三百六十三・遊

戯部五、五百十上・雑部六十五

4 椎本叢書

① 橘冬照か ② 弘化三（一八四六）跋 ③ 写本・一冊 ④ 四七丁 ⑥ 題簽「浜臣すさひ考／藍

漆考／度僧復古譚／持資平安紀行／朝鮮国王書／天説辨」。「浜臣すさひ考」は未収録。

4 随叢

・ 雑筆

5 橘冬照草稿

① 橘冬照 ② 弘化五（一八四八）写 ③ 写本・一冊 ④ 六丁

6 半切類草稿

① 橘冬照 ③ 写本・一冊 ④ 一七丁（墨付一三丁）

・ 雑抄

7 学余記事

① 橘道守 ② 慶應四（一八六八）～明治二（一八六九）跋 ③ 写本・一冊 ④ 一四丁 ⑥ 跋文

末「於慶應四戊辰明治元二己巳正月畢業／橘道守稿」

8 机上雑記

③写本・一冊 ④一九二丁(墨付一〇五丁) ⑥富士谷御杖『北辺随筆』、『雨窓閑話』などを収める。

9 机上雑載

①橘守部か ③写本・一冊 ④三三三丁(墨付一六丁) ⑥『国書総目録』では、本書を守部の著述としている。『新編武蔵風土記』などを収める。

10 机上雑誌

③写本・一冊 ④五二丁(墨付三三三丁) ⑥「近世歌人概伝」などを収める。

11 慶應四年大変書付

②慶應四(一八六八)以降 ③写本・二冊 ④二七丁／一〇五丁(墨付一〇〇丁) ⑥二冊目は『中外新聞』の写し。

12 三輪杉

①橘守部 ③写本・四冊

13 椎本漫筆

③写本・一冊 ④一五丁 ⑥「戴餅の事」「鎧餅の事」「新草餅」などを収める。諸書よりの抜粋。

四 言語

5 語法

・ 文法

14 てにをは紐鏡・詞の

①本居宣長 ③写本・一冊 ④一四二丁 ⑤「三宮山蔵」

玉緒

五 文学

1 国文

・ 小説

15 教草女房形気おしえぐさにようぼうかたぎ

- ① 山東京伝作、歌川豊国画 ② 弘化三（一八四六）〜嘉永六（一八五三） ③ 刊本・四冊八編（三〜二二存） ④ 三、四編の四冊、五、六編の四冊、九、一〇編の四冊、一一、一二編の四冊を合本。

16 釈迦八相倭文庫しゃかはつそうやまごぶんこ

- ① 万亭応賀作、二世歌川国貞画 ② 安政七（一八六〇） ③ 刊本・一冊二編（四五、四六存） ④ 四五、四六編の四冊を合本。

17 白縫譚しらぬいものがたり

- ① 柳下亭種員、二世柳亭種彦 ② 嘉永七（一八五四）〜明治八（一八七五） ③ 刊本・六冊一一編（一七、一八、四一、四二、四五、四六、五一、五二、六一、六二、六五上存） ④ 一七、一八編の四冊、四一、四二編の四冊、四五、四六編の四冊、五一、五二編の四冊、六一、六二編の四冊を合本。

18 水江物語みずのえものがたり

・ 随筆

- ① 中島広足 ② 天保二（一八三一）序 ③ 刊本・一冊 ④ 「椎本文庫」

19 校正折りたく柴の記こうせいおりのたくしばのき

都乃手振みやこのてふり

- ① 鈴木弘恭 ② 明治二七（一八九四） ③ 刊本・一冊 ④ 写本・一冊 ⑤ 二五丁

21 盲蛇論めくらへびのあげつらい

・ 日記・紀行

- ① 和漢道理仏々鹿有 ② 刊本・一冊（上のみ存） ③ 「椎本文庫」

22 蜻蛉日記抜粋かげろうにっききぼつすい

- ① 橋純一か ② 写本・一冊 ③ 四〇丁（墨付二九丁）

・ 消息

23 消息合しようそくあわせ

- ① 文政三（一八二〇）か ② 写本・一冊 ③ 六〇丁

24 春はるのふみ
25 冬ふゆのふみ

2 漢文

・ 総記附漢学

26 坤齋こんさい日抄にっしょう

①西島蘭溪 ②文政二二(二八二九)跋 ③写本・一冊(卷中のみ存) ④四三丁 ⑤「椎本文庫」
「北畠源印」唐獅子 ⑥橘凌雲写

27 読朱どくしゆ氏詩伝ししでん

①太宰春台 ②天保二(二八三一)写 ③写本・一冊 ④五四丁 ⑤「椎本文庫」 ⑥橘親写

・ 総集

28 存清ぞんせい寿集じゆしゅう

①山田琢 ②昭和一一(一九三六) ③刊本・一冊

29 照顔しょうがん雑録ざつろく

②明治写 ③写本・一冊(上のみ存) ④三四丁

・ 別集

30 蘭溪らんけい先生詩集せんせいししゅう

①西島蘭溪 ②文政二二(二八二九) ③写本・一冊 ④五八丁 ⑤「池菴」「椎本文庫」唐獅子 ⑥橘凌雲写

3 和歌

・ 撰集

31 華寿かじゆぎ玉詠集ぎよくえいしゅう

①南栖一郎 ②明治三一(二八九八) ③刊本・一冊 ⑥活字本。中西石陰序

32 古今こきん集講義しゅうこうぎ

①橋道守 ③写本・一冊 ④九五丁(墨付八二丁)

33 古今こきん和歌集序わかしゅうじよ

②安政六(一八五九)跋 ③写本・一冊 ④二四丁 ⑥跋文末「安政六末のとしの卯月」

34 新撰万葉集
しんせんまんようしゅう

35 手向の露
たむけのつゆ

・ 家集

36 いそのもくず
いそ(ママ)

37 〔詠草〕
えいそう

38 ころのしをり

39 椎の新葉
しいあらたば

40 平忠度朝臣集
たいらただのりあそんしゅう

41 橘茂丸詠草
たちばなしげまるえいそう

42 橘道守詠草
たちばなみちもりえいそう

43 橘道守詠草
たちばなみちもりえいそう

44 濤子詠草
なみこえいそう

45 野花集
のばなしゅう

46 蓬廬歌選
ほうろかせん

47 松の下露
まつしたつゆ

③写本・一冊(上のみ存) ④六八二丁

①橘道守 ②明治二八(一八九五) ③刊本・一冊 ⑥活字本。井上正直序。跋文末「橘道守」

①橘東世子 ②嘉永六(一八五三) ③写本・一冊 ④三四丁(墨付二八丁)

③写本・一帖

①橘道守 ②明治二(一八六九) ③写本・一冊 ④四五丁

①橘道守か ②明治二七(一八九四)以降 ③写本・一冊 ④九二丁

他③写本・一冊 ④四七丁 ⑤「椎本文庫」 ⑥題簽「忠度朝臣所録百首和歌／松浦系譜 冬照

筆／倭姬世紀／熱田享録図解 絵入／大嘗会式／待問雑記後論 守部筆」。このうち、「忠度朝

臣所録百首和歌」、「松浦系譜」、「倭姬命世紀」のみ存。

①橘茂丸 ③写本・一冊 ④四〇丁(墨付三五丁)

①橘道守 ②明治二三(一八九〇)以降 ③写本・一冊 ④九六丁(墨付六五丁)

①橘道守 ②明治三〇(一八九七) ③写本・一冊 ④一〇三丁

①橘濤子 ②明治二九(一八九六) ③写本・一冊 ④四〇丁(墨付三五丁)

②明治三三(一九〇〇)以降 ③写本・一冊 ④三二丁

①村上忠順著、村上正雄編 ②昭和一八(一九四三) ③刊本・一冊 ⑥活字本。序文末「山田

孝雄」

③写本・一冊 ④一二〇丁

48 道守家集 みちもりか しゅう

・ 歌合

49 音声歌合 おんせいこうたあわせ

50 擬難陳歌合 ぎなんちんこうたあわせ

51 擬難陳歌合 ぎなんちんこうたあわせ

52 九十番歌合 きゅうじゅうばんこうたあわせ

53 五十番歌合 ごじゅうばんこうたあわせ

54 三十番名所歌合 さんじゅうばんめいしよこうたあわせ

55 四十八番歌合 しじゅうはちばんこうたあわせ

56 四十八番歌合 しじゅうはちばんこうたあわせ

57 式拾四番歌合 しじゅうよばんこうたあわせ

8 古代歌謡

・ 神楽歌・催馬楽

58 神楽催馬楽歌入綾 かぐらさいばらうたいりあや

59 催馬楽 さいばら

① 橋道守 ③ 写本・一冊 ④ 三八丁（墨付三四丁）

① 橋守部 ③ 写本・一冊 ④ 六九丁 ⑤ 「椎本文庫」

① 橋守部 ② 天保一〇（二八三九）跋 ③ 写本・一冊 ④ 三六丁 ⑤ 「椎本文庫」

① 橋守部 ② 天保一〇（二八三九）跋 ③ 写本・一冊 ④ 五三丁

① 橋本直香 ③ 写本・一冊 ④ 九四丁 ⑤ 「椎本文庫」

① 橋道守 ② 明治三二（二八九九）序 ③ 写本・一冊 ④ 五三丁 ⑤ 「椎本吟社之印」 ⑥ 序文末「明治三十二年二月十二日／椎本主人 橋道守。判者、橋道守。筆者、同濤子。」

① 橋道守 ② 明治三一（二八九八）跋 ③ 写本・一冊 ④ 三二丁 ⑥ 跋文末「明治三十一年十月末／橋道守しるす」

① 橋守部 ② 弘化三（一八四六）跋 ③ 写本・一冊 ④ 五〇丁 ⑤ 「椎本文庫」 ⑥ 跋文末「弘化三年 橋東世子」

① 橋道守 ③ 写本・一冊 ④ 一八丁 ⑥ 表紙「下野宇都宮 催主 中里千族」

① 松平忠敬・橋濤子 他 ③ 写本・一冊 ④ 一二丁

① 橋守部 ② 天保一二（二八四一）か ③ 刊本・一冊 ⑥ 序文末「井田千英」

③ 写本・一冊 ④ 二四丁 ⑥ 橋守部筆

六 音楽・演劇

4 能楽

・ 謡本

60 謡本

- ② 明治四五（一九一三）
- ③ 刊本・八冊
- ⑥ 「神歌」、「楠露」、「笛の巻」、「木曾」、「梅」、「仲光」、「高野物狂」、「菊慈童」

61 桜川

- ② 昭和一一（一九三六）
- ③ 刊本・一冊
- ⑥ 昭和改訂版第廿七卷之四

七 歴史

1 日本史

・ 通史

62 国史

・ 史料

- ① （渋井太室）
- ② 江戸後期写
- ③ 写本・一冊
- ④ 六一丁
- ⑤ 「椎本文庫」唐獅子

63 稜威言別に添て奉まつるの書

- ① 橘道守
- ② 明治二七（一八九四）
- ③ 写本・一冊
- ④ 三丁
- ⑥ 巻尾「御歌所長男爵高崎正風殿」

十一 教育

1 総記

64 女大学宝箱

- ① 貝原益軒
- ② 天保六（一八三五）
- ③ 刊本・一冊
- ⑥ 刊記「天保六年乙未十一月再刻」

十五 芸術

2 書画

・書蹟

- 65 かな習字帖
① 橋守部 ② 明治二六（二八九三） ③ 刊本・一冊
- 66 旌表孝子李得成誌石
③ 刊本・一冊 ⑤ 「研山」「環翁／書房／之記」
- 67 行書千字文
② 江戸後期 ③ 刊本・一冊 ⑤ 「椎本文庫」
- 68 孝経
② 江戸後期 ③ 写本・一冊 ⑤ 「竹園／□史」「元／□」（卷末落款印）
- 69 庚申夜奉歌序
① 源順、橋東世子写 ③ 写本・一帖
- 70 〔古歌習字帖〕
③ 写本・一帖 ⑤ 「椎本文庫」
- 71 〔習字帖〕
① 橋守部 ③ 写本・一帖 ⑥ 奥書「応需晚秋書之／椎本主人」
- 72 春秋のしをり
③ 刊本・一冊
- 73 〔書道手本〕
① 金子慶雲（哲）書 ② 昭和一六（一九四一） ③ 刊本・一冊 ⑥ 奥付「昭和辛巳春彰瑩書院刊」、表紙破損。
- 74 〔書道手本〕
① （北畠）橋□昭筆 ② 江戸後期 ③ 写本・一冊 ④ 四一折 ⑤ 「北畠」「橋／□昭」（卷末落款印）
- 75 〔書道手本〕
③ 刊本・三折のみ
- 76 真跡手鑑
③ 刊本・一冊（上巻のみ存）
- 77 近道子宝
① 平井自休 ② 文化一一（二八一四）写 ③ 写本・一冊 ⑥ 跋文末「文化十一年／亥乙四月／岩元勝章」
- 78 唐詩五律三首帖
① 〔鈴木〕翠軒 ② 昭和八（一九三三） ③ 刊本・一帖

79 富士山記・河原院賦

②江戸後期 ③写本・一冊 ④一七丁

80 吉田松陰遺墨帖

①玖村敏雄編 ②昭和一七（一九四二） ③刊本・二冊

81 臨書

①橘守部 ③写本・一帖

82 若菜帖

②昭和一二（一九三七） ③刊本・一帖

・ 考古

83 徴古図録

①長野美波留編 ②文化八（一八一）序刊 ③刊本・一冊 ⑤「椎本文庫」

3 金石

・ 碑帖

84 内裏殿門額写

③写本・二〇枚 ⑥堀河左大臣俊房公建長七年十月廿日以蓮華王院宝蔵書写／貞觀殿、校書殿、紫震殿、常寧殿、仁寿殿、春興殿、弘徽殿、清涼殿、温明殿、後涼殿／堀河左大臣俊房公建長七年十月廿日以蓮華王院宝蔵書写／承明門、宣陽門、宣穰門、建礼門、長楽門、永安門、内衙門、明義門、右腋門、会昌門、応天門（「長楽門」欠）。

十六 諸芸

4 華道

85 遠州流插花四季園

①松柏斎一瓢 ②文化一〇（一八一三） ③刊本・四冊

86 插花衣之香

①貞松斎一馬 ②享和元（一八〇一）か ③刊本・一冊 ⑥序文末「貞松斎一馬」

十八 準漢籍

1 經部

87 尚書禹貢考

- ① 龜田綾瀨 ② 天保頃写 ③ 写本・一冊 ④ 五八丁 ⑤ 「北畠／源印」 ⑥ 橘親写

88 論語摘采

- ② 文政一三（一八三〇）写 ③ 写本・三冊（一、三、四存） ④ 一・四四丁、三・七九丁、四・

89 孟子集注大全評釈

- 三三丁 ⑤ 「椎本文庫」「蓬壺」「蓬壺／図書」「太平時／節英／雄嬾」

90 孟子摘采

- ① 伊藤東涯 ② 天保二（一八三一）写 ③ 写本・一冊 ④ 四一丁 ⑥ 橘親写
- ② 天保頃写 ③ 写本・一冊 ④ 五八丁 ⑤ 「太平時／節英／雄嬾」「椎本文庫」「橘庭」「蓬壺」

十九 漢籍

91 讀書管見

- ① 元・王充耘 ② 天保三（一八三二）写 ③ 写本・一冊 ④ 七四丁 ⑤ 「北畠／源印」「椎本文庫」 ⑥ 橘親写

92 詩本義

- ① 宋・歐陽修 ② 天保三（一八三二） ③ 写本・二冊（乾・坤） ④ 乾・一〇二丁、坤・六七丁

93 宋劉公是先生七經小伝

- ① 宋・劉敞 ② 天保三（一八三二）写 ③ 写本・一冊 ④ 二六丁 ⑤ 「椎本文庫」「橘庭」 ⑥ 識語「橘親太傳識」

94 論語筆解

- ① 唐・韓愈著、黄之堯閱 ② 文政一一（一八二八）写 ③ 写本・一冊 ④ 二〇丁 ⑤ 「椎本文庫」 ⑥ 橘香村写

95 大学証文

- ① 清・毛奇齡撰 ② 文政三（一八二〇）「天保三？」写 ③ 写本・一冊 ④ 一二丁 ⑤ 「椎本文庫」「北畠／源印」 ⑥ 橘親写。龍威秘書の一。

96 新刻助語辞

- ① 明・盧以緯著、胡文煥校 ② 寛永一八（一六四二） ③ 刊本・一冊

97 義門讀書記

- ① 清・何焯（岷瞻） ② 天保二（一八三一）写 ③ 写本・一冊 ④ 五三丁 ⑤ 「北畠／源印」

⑥ 橘凌雲写

① 清・顔懋功 ② 文政一一(一八二八)序 ③ 刊本・二冊各八卷(平聲、仄聲) ④ 「柳島」「椎本文庫」「錦所/玩具」「錦所/蔵書」

〔註〕

- (1) 鈴木暎一『橘守部』(昭和四十七年、吉川弘文館)をはじめ、橘純一「橘守部翁小伝」(『橘守部全集首巻』大正十一年、国書刊行会)、宮野敏子「橘守部」(『文学遺跡巡礼国学篇第一輯』昭和十三年、光葉会)が基礎的な事項をおさえた文献である。
- (2) 『国語と国文学』(三十一卷四号、昭和二十九年四月)は東條操「橘純一君を悼む」、関根俊雄「橘純一教授略年譜・著作目録」を収める。また、『解釈』(六卷二号、昭和三十五年二月)は、橘純一教授追悼記念号と題して、諸家の追悼文、関根俊雄「橘純一教授略年譜・著作目録」(『国語と国文学』所収の年譜を若干増補したもの)を収録する。
- (3) 嘉永元年(一八四八)七月五日、守部は(名義は茂三冬照)、池田満次郎家来片山秀徳所持の柳島村の屋敷地二四三坪を永代譲渡され、これ以後、土地の地代・家賃等が橘家の収入となった。屋敷地譲渡は松浦家の配慮と考えられる。翌年、守部は歿した。安政四年(一八五七)十一月九日に冬照は松浦豊後守家(肥前平戸新田一万石、当主は脩)より五合五人扶持を賜り、さらに同七年(万延元年)十一月十八日には松浦豊後守家から本藩松浦肥前守(当主は詮)に帰属することになった。
- (4) 冬照の歌学者としての一面に注目した論考として、たとえば、中澤伸弘「近世後期の和歌添削指導―椎本橘冬照先生添削『月次和歌集』の一考察―」(『東洋文化』八十一号、平成十年九月)がある。
- (5) 『明治歌集』。第一篇(七冊)明治八年刊。第二編(三冊)明治十年刊。第三篇(十二冊)明治十二年刊。第四篇(四冊)明治十三年刊。第五篇(三冊)明治十五年刊。第六篇(三冊)明治十七年刊。第七篇(三冊)明治二十年刊。第八篇(三冊)明治二十三年刊。第九篇(三冊)明治三十二年刊。第六篇以降は道守の編。
- (6) 森繁夫『名家伝記資料集成』(昭和五十九年、思文閣出版)では、濤子生年が、嘉永五年九月二十九日となっているが、誤りである。また『和学者総覧』(平成三年、汲古書院)においても、享年を七十九歳と誤りがある。
- (7) 茂丸(一八七〇〜九七)、礼子(一八七四〜?)、道子(一八七七〜八〇)、照子(一八八一〜八四)、千代子(一八八四〜八八)、

- 千枝子（一八八六〜九五）、守雄（一八八八〜九五）、百枝（一八九四）
- (8) 香代子（一九一八）、山中氏に嫁す）、茂一（一九二〇〜四一）、文二（一九三三〜九九）、力三（一九二五〜二〇〇四）、タミ（一九二七）、玉谷氏に嫁す）、武四（一九二九）、一時児島氏養子）
- (9) 東條操「橘純一君を悼む」、『国語と国文学』三十一巻四号、昭和二十九年四月）
- (10) 東京帝国大学文科大学文学部国文学専修科、明治四十二年七月の卒業写真の人名は次の通りである。一列目右から、橘純一（5東京）、荒瀬邦介？（8山口）、鈴木周作（12千葉）、次田潤（1岡山）、和田廉之助（15福岡）、瀬尾武次郎（16広島）。二列目右から、関根正直講師（明三四）、佐佐木信綱講師（明三八・七）、上田万年教授（明二七）、芳賀矢一教授（明三五・九）、吉岡郷甫講師（明四〇・二）、保科孝一助教授（明三三・一〇）。三列目右から、白石勉（10愛媛）、林昶（6千葉）、高木武（3熊本）、和田卯吉（11東京）、塚田芳太郎（9千葉）、堀川美治（13兵庫）、藤田篤（18京都）、中勘助（7東京）、大矢泰英（17愛知）、山崎麓（4兵庫）。四列目右から、青木正（2兵庫）、藤岡作太郎助教授（明三三）、四三・二没）、佐々政一講師（明三七・七〜四二・七）、三矢英松（14山形）。以上、（ ）内は、『東京大学卒業生氏名録』（一九五〇）記載の出身地と卒業順位。教官については、職位就任の年次を『東京帝国大学学術大観』（一九四二）によって記した。
- (11) 跡見学園女子大学短期大学部図書館所蔵本では、純一手写の守部著作『十段問答』（国学書）、『墨繩』（教訓書）が貴重と言えよう。目録の類は発行されていない。
- (12) 府立一中在学中、二高在学中、および卒業後の三八会―二高明治三十八年卒業生の同窓会―、東京帝国大学卒業時、東京帝国大学助手時代、府立五中教諭時代、二松学舎専門学校時代などがある。
- (13) 勝海舟は、橘東世子編『明治歌集』第一篇（明治八年刊）、橘道守編『明治歌集』第七篇（明治二十年刊）に序文を記しており、橘家との交遊があったと知られる。また、井上文雄は守部、冬照と交遊があった、徳川時代後期の国学者歌人。
- (14) 両機関所蔵本に関しては、『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選図録解題』平澤五郎「橘守部撰述現存諸稿本とその成立について」(一)(二)(三)、『斯道文庫論集』十七・十九・二十号、昭和五十六年二月・同五十八年三月・同五十九年三月）、『天理図書館稀書目録和漢書之部一・二・三』などを参照されたい。
- (15) 徳田進『橘守部の国学の新研究』（昭和四十九年、高文堂出版社）、同『橘守部と日本文学』（昭和五十年、芦書房）参照。
- (16) 朝日町歴史博物館では、『橘守部と伊勢の国学者たち』（平成十二年度特別展）、『守部と秋主と平戸藩』（平成十五年度企画展）

が催され、それぞれ図録が発行されている。

(17) 鈴木暎一『橋守部』(昭和四十七年、吉川弘文館)による。

(追記) 橋純一の二松学舎における教員履歴に関連して、新たに資料が見出されたので、補足資料として掲載する。昭和二十三年四月から専任教授に再任され、専門学校と高等学校(昼間部主任)に教鞭をとる傍ら、翌年の大学昇格にむけて図書館長として図書館の整備に当たっていたことがわかる。

〈山田準あて橋純一書簡、昭和二十三年八月二十六日付、二松学舎大学図書館所蔵〉

(前略) 昭和十五年末、陸軍の学校に呼ばれてまゐりましたが、五ヶ年餘で終戦となり自然退職、それまで、二松学舎でも戦争のため殆ど授業がなかつたので、従つて私如き専職のあるものは自然、学舎と御疎遠になつてをたのでありますが、学校が代々木富ヶ谷の仮教室でやつてをりました頃、又数時間の授業を持たせていたゞき、今日に至りました。本年四月からは本校の専任教授といふことになり、週に四日は朝定刻より夕の四時まで勤務してをります。殊に大学昇格方申請のため、図書の整備を急がねばならぬ關係上、只今暑中休暇になりましたからは毎日出勤、生徒相手に焼残り国書の整理に従事いたしましたをりますが、かういふ整理仕事は天性の不得手で実効挙らず、心苦しく存じをります。本校ではこの四月から高等学校を附設致しましたが、昼間部は一年だけ僅かに十六名の生徒、夜間部は四年だけ募集、これが四十名ばかりでございます。昼間部は私が主任といふことで、平均十六、七歳の少年の世話に当つてをりますが、すなほな子供が多いため大へん気持よく、久しぶりで教育家らしい気分を味つてをります。先日、生徒と共に房州保田の海浜に一泊で遊びに参り鋸山に登攀し海水に浴し清興を催した次第でございます。(以下略)